論　文　ニダバ (*Nidaba*) 35(2006), 125-134

日本と中国の酒に関することわざの対照考察(2)

王　　雪
浮　田　三　郎

0. はじめに

諺は先人の知恵や経験などを濃縮した精髄である。諺には包含されている分野が幅広いと言える。その中で、多くの人間社会で存在している酒に関して、先人は酒に対する思考と賛否を諺の中に預けており、様々な考えが構築されている。本稿では、酒に関する日本と中国の諺の対照比較を行い、諺に現れている両国民衆の表現と考え方を明らかにすることを目的とする。

今回の研究対象として、日本の諺は、『故事・俗信ことわざ大辞典』(小学館 1982)を中心に、取り出した。一方、中国の諺は、『中国俗語大辞典』(上海辞書出版社 1989)を中心に抽出した。この『中国俗語大辞典』は中国の現代の諺辞書の中では、諺の数から言えば、最も規模の大きい諺辞典である。

考察方法としては、これらの諺を便宜的にではあるが、下記のような基準に従い、分類する。(1)表現は異なるが、意味内容が類似している両国の諺；(2)表現と意味内容はほぼ同じであるが、由来が考証できぬ両国の諺；(3)表現は異なるが、意味内容が大体同じである両国の諺；(4)表現も意味内容も完全に対応していないが、共通の話題を扱う両国の諺。

なお、(1)、(2)、(3)についての諺はすでに「日本と中国の酒に関する諺の対照考察(1)」[1]で考察した。今回はまだ分析していない「(4)表現も意味内容も完全に対応していないが、共通の話題を扱う両国の諺」[2]に焦点を当て、両国の諺の対照比較を行う。

2. 内容による日中の諺の対照考察

以下の用例を挙げる際には、日本の諺には「J」、中国の諺には「C」という符号をつける。意味内容が完全に対応していないが、両国とも共通の話題を扱う諺の対照考察を行ってみる。

2.1　酒の飲み方

(日) J1「酒三杯身の薬」

J2「人酒を飲む、酒酒を飲む、酒人を飲む」

J3「酒は飲むとも飲まるるな」

J4「酒は飲むべし飲むべからず」

J5「酒は少し飲めば益多く、多く飲めば損多し」

（中）C1「一天一口酒，能活九十九」（一日一口のお酒で、九十九まで生きられる）

C2「会喝酒，能治病；不会喝，能要命」（酒が飲めるなら、病が治せるが、酒が飲めないなら、命が奪われる）

C3「饮酒适量是良药，酒量过度是砒霜」（適当な酒は良薬になる、過量な酒は砒素になる）

C4「少饮如蜜，醉饮似毒」（少なく飲むと、蜜のようであるが、酔うほど飲むと毒のようである）

C5「勿贪意外财，不饮过量酒」（意外な財貨を貪ってはいけない、酒を飲み過ぎてはいけない）

C6「吃酒不吃菜，必定醉得快」（酒だけ飲み、料理を食べないと，早く酔う）

まず、日本の諺の意味を見ると、J1では、酒も三杯程度の適量ならかえって体の薬になるといっている。J2では、酒を飲みはじめには、まだ自制心があるが、やがて酔いにまかせて飲み、はては酒に飲まれて乱行に及ぶということを語っている。J3では、酒を飲むのはさしつかえないが、飲み過ぎて理性を失い、酒に飲まれてしまうような結果になると示唆している。J4では、酒は飲んでもよいが、程度を超えて飲んではならないと教えてくれる。J5では、酒を飲むには、各人によってよい程の節があると言っている。

他方、中国の諺の意味を逐語的に日本語に訳したが、諺の内容をもう少し詳しく付け足してみよう。C1では、養生という方面から、酒の量をいっている。C2では、飲む人の飲み方によって、即ち、飲む量の多少により、病を治したり、命が奪われたりすることも可能であると語っている。C3、C4では、酒の適量と過量によってもたらされる効果がまったく正反対になることを示している。C5では、人間の貪欲に意外な財貨と過量な酒で満たしてはいけないと教えてくれる。C6では、酒を飲む時、料理を食べないと、体に悪い影響が出るといっている。

「酒の飲み方」に関して、両国の諺に両国民衆が同様な考え方を持っていることが窺える。それは、酒を適切に飲めば、体によい効果が出るが、酒を飲みすぎると、体を壊すことになるということである。

人間が酒をどのように飲むかにより、酒によってもたらされた効果が全然違うことが諺の中に反映されている。日本の諺では、酒三杯が体に良く、酒を飲んでもよいが、度を越してはいけないと強調している。また、少し飲めば、体に益があるが、多く飲めば体に損が出、酒を飲む時の人の様子など、直接酒の飲み方が述べられている。中国の諺では、一日に一口酒を飲むのは養生のよい方法であり、飲み方によって、酒が「病を治す薬」と「命

を奪う物」、「良薬」と「砒素」、「蜜」と「毒」になるという両極端の作用があり、人に対する様々な影響が述べられている。また、食事する時は、酒を料理と一緒に取ったほうが人の体に負担がかからないことも語られている。

2.2 酒の両面性

（日）J6「酒は気違い水」
J7「酒は諸悪の基」
J8「酒は諸道の邪魔」
J9「酒に上から剣の舞」
J10「酒に十の徳あり」
（中国に出典のある日本語の諺：J11～J18）
J11「酒は百薬の長」
J12「酒は量りなし、乱に及ばず」
J13「酒を嗜む無かれ、狂薬にして佳味に非ず」
J14「酒極まって乱となる」
J15「酒口に入る者は舌出ず」
J16「酒は詩を釣る色を釣る」
J17「酒は憂いを払う玉箒」
J18「酒が尽くれば水を飲む」

（中）C7「好酒除百病」（よい酒は百種の病を治す）
C8「酒病酒药医」（酒でかかった病気は酒薬で治す）
C9「吃了十分酒，方有十分气力」（十分の酒を飲むと、まさに十分の力が湧いてくる）
C10「酒坏身子，水坏路」（酒は体を壊すが、水は道を壊す）

まず、両国の諺の意味を見てみよう。J6 では、酒は人の気を狂わせる飲み物であるといっている。J7 では、酒はすべての悪事の元であるといっている。J8 では、飲酒は諸事の障りとなることを語っている。J9 では、酔ったあげく、刃物を振り回すはめになるといっている。以上取り上げた日本の諺は、全て単肢文で成り立っているので、表現の中に出ている酒が「気違い水」、「諸悪の基」、「諸道の邪魔」、「剣の舞」、「身の薬」などに喩えられている。J6～J9 は全て酒の害を説く諺である。

酒が「気違い水」のように喩えられるのは、酒がもたらす悪い効果を人々に警告しているからである。「諸悪」は多種多様な悪いことを指す。酒が悪を働く根源となることを示唆している。「諸道」には世間での仕事や習い事などを総括している意味が含まれている。酒のせいで、人が酔ったら、剣などの刃物を振り回すような行動に出る危険性があることも

諺の中から窺える。また、諺の中で、「気違い水」、「諸悪の基」、「諸道の邪魔」、「剣の舞」というような言葉を用い、酒を強く批判していると思われる。

しかし、酒は両面性があると言っても過言ではなかろう。酒はそれなりに人々に愛され、賛美される面もある。日本人には「酒に十の徳」(J10) があると思われている。「十の徳」とは、「百薬の長である、延命長寿をもたらす、旅行の食となる、寒さのしのぎ、推参に便利である、憂いを忘れさせる、位無くて貴人と交わる、苦労を癒してくれる、万人と和合できる、独居の友となる」ということである。日本人なりの考えがあるばかりでなく、中国から伝わってきた詩や名句なども日本人に吸収され、日本文化になったものもある。

J11～J18 は、中国に出典がある諺である。中国ではまだ名詩、名句として扱われているが、日本では諺という形に変わったのである。それぞれの意味を見てみよう。J11 では、酒を適度に飲むならば、どんな薬よりも体に一番よいといっている。酒を飲むと、血管が広がり、血液の循環がよくなり筋肉のこりをほぐし疲れを取ってくれるのである。また気分の転換をはかることができ、ストレスを解消してくれるし、食欲を増進し睡眠を促進する。快眠快食は長寿に通ずるものである。酒は人間の体と心に働く百薬の長である。J12 は孔子が自らの節度ある生活態度を述べた言葉である。酒はどのぐらい飲むか分量は決めずに飲むが、酔って自分自身を取り乱すようなことはない。節度を失うことのない酔い方を持って自分の飲酒の定量とするということである。J13 は、酒を好んではいけないと語っている。酒は気違い水であって、決してうまいものではない。中国、宋の范质が兄の子を戒めた詩の一節である。J14 の次に続けて「楽しみ極まって悲しみとなる」という文がある。礼儀的に節度正しく始まった酒宴も極点に達すると、酔狂のあげく酒席も乱れたものとなる。J15 では、酒を飲むと口数が多くなり、そのために失言も出ることをいっている。J16 では、飲酒は詩作の動機となり、また、色情のさそいだすものでもあると述べている。J17 の「箒」は、ほうきの意である。「玉」は酒を賛美する言葉である。酒は心配事や悩み事を払い去ってくれるすばらしい箒のようなものである。J16 と J17 は、北宋の詩人・文章家の蘇軾が (号東坡、1036～1101) 酒の効用やすばらしさを賛美したものであり、「洞庭の春色」という詩に見られることばである。蘇軾は「酒はまさに詩を釣り上げる釣り針のようなものであり、また愁いやつらいことを忘れさせてくれ、清めてくれる、玉のように美しい箒のようである」と酒をたたえている。J18 は、酒を飲みつくすと水でも飲む。飽くことがないたとえである。蘇軾の詩は、酒がなければないで、その代わりとして水を飲んで満足している意である。

一方、中国の諺では、C7 では、よい酒は病を治す薬であるといっている。また、C8 は酒を飲むことによって起こった体の不調は酒という薬で治すということから、問題を引き起こした人はその問題を解決すべきであるということのたとえである。C9 では、酒を飲むことによって、力も湧いてくることを述べている。C10 では、酒の悪効果をいっている。酒の効果については、貝原益軒の『養生訓』の中に「酒は少し飲めば陽気を補助し、血気

をやわらげ、食気をめぐらし、愁いを取り去り、興をおこしてたいへん役に立つ。またたくさん飲むと酒ほど人を害するものはほかにない。ちょうど水や火が人を助けると同時に、また人に災いをするようなものである」という酒のプラスとマイナス効果を訓じている。さらに、王湘仁（2001, P. 284）も「酒が酒であるのは、アルコールが人の精神を興奮させ、人の意識を朦朧とさせることができ、興奮剤と麻酔剤の効能を有するからであり、まことに不思議である。臆病物は酒を飲んで勇気を奮い起こし、気が滅入っている者は酒を飲んで憂さを晴らし、儀式の参加者は酒を飲んで儀式を行い、祝う者は酒を飲んで祝って喜ぶ。ただ、限度をしっかりわきまえることが大事で、飲みすぎれば、おそらく楽しみが極まって悲しみが生じ、憂いに憂いを重ね、願いと相反することになる」という酒がもたらす効果に対する人間の反応を述べている。

酒の両面性が語られる諺を見てみると、酒の善を説き、一方、酒の悪を説くまったく意味が反対している反義的諺も存在している。反義的な諺に関して、温端政（1991, P140）は「それぞれ意味が対立している諺を反義的諺と名づけている。なぜ反義的諺が生まれるかというと、人間の生活体験は千差万別で、その結果、異なった認識、異なった結論が生まれるからであろうと思われる」とその定義と生まれる理由を述べている。また、酒そのものは善悪がなく、酒を扱う人間の行動によって、まったく違う効果が出ることを語る諺もある。酒の悪いところを語る諺は J6～J9、J13～J15、J17、J18、C10 である。良いところを語る諺は、J10、J11、C7、C9 などがある。また、酒は善でもない、悪でもない、酒を扱う人間のやり方により、導く結果が異なるという諺は、J12、J16、C8 などである。

なお、J11～J18 では、出典が考証できる酒に関する諺である。その出典に関しては、次の表のようにまとめている。

表 1　中国から伝わってきた諺の出典表

中国の名詩名句からの諺	出　　典
J11「酒は百薬の長」	「夫盐食肴之将，**酒百药之长**，嘉会之好」〔漢書—食貨志・下〕
J12「酒は量りなし、乱に及ばず」	「肉虽多，不使胜食气。**唯酒无量不及乱**。」〔論語－郷党〕
J13「酒を嗜む無かれ、狂薬にして佳味に非ず」	「**戒而勿嗜酒**，**狂药非佳味**。能移谨厚性，化为凶险类。古今倾败者，历历皆可记」〔小学—嘉言〕
J14「酒極まって乱となる」	「**酒極則乱**、楽極則悲」〔史記－滑稽伝-淳于髡〕
J15「酒口に入る者は舌出ず」	「齐桓公置酒，〈略〉管仲曰，臣闻之，**酒入口者舌出**，舌出者弃身，与其弃身，不宁弃酒乎」〔韓詩外伝——〇〕
J16「酒は詩を釣る色を釣る」	「**应呼钓诗钩**，亦号扫愁帚」〔蘇軾—洞庭春色〕
J17「酒は憂いを払う玉箒」	「应呼钓诗钩，**亦号扫愁帚**」〔蘇軾—洞庭春色〕
J18「酒が尽くれば水を飲む」	宋代の詩人、蘇軾（東坡）の詩「有酒不辞醉，**无酒斯饮泉**」

以上挙げた諺が日本の諺として成り立っているのは、日本人に自分達の文化思想として認められている証拠である。中国の古典著作や詩からそのまま伝わってきた諺は、歴史的には古いが、しかし、諺の内容として、今日でも立派に通用することができると言える。それに、元々中国の文化であったが、日本に定着し、いまは日本人の知恵として運用されている。これらの文句はいまでも中国の古典文学の中で、名詩名句として活用されていると同時に、日本文化に溶け込み、日本の名句になり、諺として現在まで保ち続けられている。滑川（1985、P,230）も「漢民族の文化ともいえる中国文化がわが国に伝来するにおよんで、仏教、文字、衣・食・住の技術が伝えられると、日本人はたくみに日本化して文化を創り出していった。都市を中心に新文化が広がっていく。ことわざの世界にも中国文化が影を投げかけている」と中国文化が日本への影響を述べている。

日中の諺では、共に酒を称えたり、酒を批判したりしているのである。その中で、酒の悪い方面を述べる諺の表現として、日本の諺では、酒を飲むと、人間は悪事を働く行動に出るという考えを反映しているが、中国の諺では、酒が体を壊す物であるという考えを反映している。酒のよい所を表現する諺として、日本では、「酒に十の徳」で酒を飲むことによって、酒で体が癒されたり、人間同士の関係を一層親しくさせたりすることもできると考えられている。中国では、酒を飲むと、病気も治ったり、力も入ったりすることなどが述べられている。

2.3　酒と人間性

（日）J19「酒が言わする悪口雑言」
　　J20「酒は本心をあらわす」

（中）C11「一分醉酒，十分醉德」（一分は酒酔い、十分は徳酔い）
　　C12「酒能乱人性」（酒は人間性をかき乱すことができる）
　　C13「酒后无德」（酒を飲んだ後は道徳がない）
　　C14「酒后吐真言」（酒を飲んだ後は本音を吐く）

「酒と人間性」に関する日本の諺の意味を見ると、J19 では、酔って人を罵倒したりするのは、みな酒のせいであると述べられている。悪口雑言は人が酔ったあとよく言うということである。酒に酔った人が使う言い訳にもなると言える。J20 では、酒の酔いはふだん包み隠しているその人の本性をさらけ出してしまうことを意味する。人間は、普通本心を隠し、本音を言わないのであるが、酒を飲んだ後、つい本音を言ってしまう傾向があるといっている。

他方、中国の諺では、C11 は、酒を少し飲んで酔ったのは酒酔いだと言って済ませるが、飲みすぎて自分をコントロールできなくなったら、道徳に反する悪事をすることを示して

いる。いわゆる、少しぐらいの酔いは、酒に酔ったことだけだが、泥酔すると、本性を失うことになると言っている。酒飲みが度を越えたら、自分自身も自己管理ができなくなる。C12 の意味は、酒は人の本性を乱すことである。C13 では、酒を飲んで、酔ったら、普段の礼儀正しさを失い、道徳も守らなくなると述べている。また、「酒乱性（酒は人の性質を乱す)」とも言われる。どんなに礼儀正しい人でも、酒を飲み、酔っ払ったら、人間性を失う傾向がある。これは C12 とほぼ同じ意味である。C14 では、酒を飲んだ後、人はぼんやりしている状態の中で、普段では心にしまっておく隠し事や気持ちを全部さらけ出すことがある。これは、J20 と大体同じ意味になる。

「酒と人間性」の分析の中では、両国共に、人が酒に酔った後に人の品質をさらけだすことが諺の中に反映されている。諺の中で、酒を飲むと、理性的な自分を失わないように気をつけなければならないと示唆している。J11 と C13 は、酒を飲んだあと、口から下品な言葉が出やすいと言っている。C13 のほうは、人間の品質・道徳と結びつけているので、酒に酔った人の行為を強く批判する程度は、J11 より厳しいである。J11、J12 では、酒は悪口雑言と人間の本心を引き出すことがあるということを語っている。C11～C13 は、酒を飲む度合いと酒を飲んだ後の人間の「徳、人間性」を強調している。諺に見る「酒と人間性」という関係では、日中の諺は形式が異なっているが、同じ内容が語られることが分かった。その内容として、酒は人間性を乱すことがあり、酒を厳しく批判していると同時に、酒を飲んだ後、本音を吐くことにもなると述べられている。所謂、酒は人間の悪い面と本心を導き出す可能性のあるものである。穴田（1982、P, 104）も「人を知る酒が近道、酔って本性を表すと、パーソナリティの核的部分は酒を飲むことで表面に出るという考え方がある。逆に言えば、人間普段は役割行動や仮面をかぶっているものであると考えられる」というように酒と人間との関係を述べている。

2.4　酒と人間関係

（日）J21「酒買って尻切られる」
　　J22「酒は先に友となり、後に敵となる」

（中）C14「感情深，一口闷；感情浅，舔一舔」（感情が深いなら、一口飲め。感情が浅いなら、一口舐めろ）

「酒と人間関係」に関する諺の意味を見てみると、J21 は、相手に酒をおごってやったのに、相手からかえって尻を切られるような目にあわされるという意味である。好意を尽くしたのに、かえって損害を受けることのたとえである。「酒」は、「酒」そのものの意味がなくなり、相手に捧げた「よい事柄」としての喩えである。直接酒には関係がなく、酒を奢った相手から、被害を被ったことになる。人間関係の複雑さと背後にある不信感も窺える。J22 では、酒は友をつくるきっかけになるが、後でその友が敵となる原因にもなるこ

とを意味する。酒でつくった友は敵に転換する可能性があるといっているのであろうか。人間関係の複雑さを J22 から窺うことができる。

C14 は、感情が深ければ、一口で飲み干す、感情が薄ければ、舌先で嘗めることを意味する。酒宴で相手に酒を勧める時、よく聞かれる言葉である。二人の仲がいいことを示すために、一口で酒を飲まなくてはならない。酒を飲むと、友人との相互の親近感、一体感を醸成し、互いに胸襟を開くことになる。酒は人間関係の潤滑油として働くものである。

「酒と人間関係」という節では、日本の諺では、相手に酒をおごってあげたのに、相手から裏切られる。人間関係の中での不信感を述べると同時、人間関係の複雑さも述べている。中国の諺は人間同士の友情をたたえ、酒によって人間関係をスムーズに運ぶことを語っている。

3. 日中の酒に関する諺に見る比喩の基本的構造と考え方

3.1 比喩の基本的構造－酒は薬、酒は毒－

以上、酒に関する諺をいくつかの角度から、分類し検討してきたが、これらの多くの諺には基本的に、「酒は薬」と、「酒は毒」といった比喩の基本的な構造を見ることができる。私達はこの基本的構造を理解しているのに、「詩を釣る」や「憂いを払い」のは酒の薬の効果であり、「剣の舞い」や「乱に及ぶ」のは、酒の毒の効果であると解釈するのである。

そして、酒は、ある時は薬になり、ある時は毒となるのであるが、そのある時とは、多くの場合、酒を飲む量が条件となっているようである。即ち、酒は、少量あるいは適量に飲む場合は薬の効果を持ち、大量あるいは過量に飲めば毒の効果を持つというのである。

酒が薬となるか毒となるかは、その条件の有無で日中の諺表現の対照を下記の表にまとめてみる。なお、太字で下線がついているのは、出典が中国にある諺である。薬と毒の両方とも挙げてある（J5、J16）と（C2～C5）は、酒が薬（益）と毒（損）の効果が対句になっている表現である。

表 2　酒に関する諺に現われる比喩の基本的構造の対照表

基本的な考え方	条　件	日　本	中　国
薬	なし	J10、<u>J11</u>、<u>J17</u>	C7、C8、C9
	あり （飲み方――少量、適量）	J1、（J5、<u>J16</u>）	C1、（C2、C3、C4、C5）
毒	なし	J6～J9	
	あり （飲み方――多量、過量）	J2、J3、J4、<u>J12、J13、J14、15</u>、J19、J20（J5 <u>J16</u>）	C10、C11、C12C、C13 （C2、C3、C4、C5）
その他		<u>J18</u>、J21、J22	C6、C14

3.2、酒に関する諺に見られる考え方

第2節で分析したように、同様な話題を扱う諺でも、物事を見る立場が違うことなどから、表現の仕方や、語られている諺の内容も異なっている．これは両国の生活習慣や発想の違いに関係があると思われる。上に述べてきた「酒」に関する共通の話題を扱う諺の対照関係を下記の表でまとめてみる。

表3　日中の酒に関する諺に見られる考え方の対照表

	諺に見られる日本の考え方	諺に見られる中国の考え方
酒の飲み方	酒を飲む時、少量は益であり、過量は損である。	
酒の両面性	様々な比喩表現が用いられ、酒の良い効果と悪効果が語られる。中国に出典のある諺は酒の両面性に言及している。	酒は病を取り除く薬である。 直接酒の良し悪しが述べられている。
酒と人間性	酒を飲むと、その人の人間性の悪い面を表われ、口に出す言葉も汚くなる。さらに、本心を表わす言葉も口に出す。	酒に酔った後、その人の人間性と悪いところを暴露する。本音も吐くことがある。
酒と人間関係	人間関係の複雑さと不信感が窺える。	酒は人間関係の潤滑油になる。

4. まとめ

以上、酒に関する日本と中国の諺の対照考察を試みた。酒の諺に、酒の風俗習慣が反映されている。酒の風俗習慣には、民族の心理と性格特徴などを現している。諺から、日中両国の民衆は酒に対する考えがどうなっているかは窺うことができる。特に共通の話題を扱う諺に、「酒の飲み方」、「酒の両面性」、「酒と人間性」、「酒と人間関係」という面から分析を行ってみたが、「酒の飲み方」では、少なく飲むと体によいことになるが、多く飲むと体に悪い影響をもたらすと語られている。「酒の両面性」では、日中の諺とも酒の良し悪しが述べられている。「酒と人間性」では、日中とも、人間の悪いところを暴露すると言及している。また、日本の諺では、酒を飲むと、人間の表では、悪口雑言を口に出すが、裏では、普段見えない人間性の裏の姿が見られるといっている。最後に「酒と人間関係」では、日本の諺では、裏切られる人間の様子と複雑な人間関係が語られている。中国の諺では、酒が人間関係をスムーズにするための欠かせないものであると述べられている。それぞれ民衆は酒に映している人間関係への考え方が窺える。

酒に関する諺は、物質文化と精神文化の整合体として、民族の文化を表現し、そこに見られる考え方は民族文化の深層部分の一つになっている。「酒は人類の造った嬉しい文化の一つである。さまざまな民族には大抵この文化があり、国民はそれに誇りと憧れ、親しみと浪漫を寄せながら長い歴史の中で育て上げてきた」と小泉（1992, 235）は述べている。

酒に関する諺を通し、酒を反映する文化が一つの角度から見えてくるだろう。まだ論述していないほかの共通話題（「酒と女」、「酒と礼儀作法」、「酒と年中行事」など）を扱う諺があるが、紙面の都合で検討することができなかった。それは今度の考察課題とする。

注

(1)　「日本と中国の酒に関することわざの対照考察（1）」『ニダバ』(2005) の 125 - 134 を参照する。

(2)　「日本と中国の酒に関することわざの対照考察（1）」で、両国の諺を五種類に分け、その中の三種類に焦点を当て、対照考察を行ったが、本稿では、中国に出典がある諺も内容により、「共通の話題を扱う諺」という類に帰属し、対照分析を行うことにした。

【参考文献】

穴田義孝（1982)『ことわざ社会心理学』　人間の社会社

白石大二（1977)『飲食事辞典』　柴田書店

王　仁湘（2001)『中国の飲食文化』(鈴木博　訳)　青土社

温　端政（1989)『中国俗語大辞典』上海辞書出版社

温　端政（1991)『諺語のはなし—中国のことわざ—』高橋均　高橋由利子編訳　光生館

小泉武夫（1992)『日本酒ルネッサンス　—民族の酒の浪漫を求めて—』　中央公論社

柴田武　谷川俊太郎　矢川澄子　編（1995)『世界諺大辞典』　大修館書店

尚学図書編集（1982)『故事・俗信諺大辞典』　小学館

新村出版（1998)『広辞苑　第五版』　岩波書店

鈴木棠三（1962)『諺処世術』東京堂

盛　毓度（1979)『中国人 5000 年の生活の知恵』三天書房

大東文化大学中国語大辞典編纂室（1993 年)『中国語大辞典』角川書店

檜谷昭彦（1979)『諺の世界』日本書籍

G・レイコフ，M・ジョンソン（1986)『レトリックと人生』(渡邊昇一、他訳）大修館書店